常日頃より機会を見て社会貢献の活動を続けて行こうとしています。今回は 2023 年 5 月 26 日 にフロンティア大学大学院人間科学研究科 修士課程臨床心理学専攻の大学院生を対象にして、「発達心理学特論」に関連した下記のお話をさせていただきました。(社会貢献よりも、若い人たちとの交流を楽しんだ企画でした。)

「臨床心理学教室のパンプキンさん; こころに痛みを持つ人の自己治癒能力と生きる力について」

現在、7月末頃出版の予定で準備を進めています上記の表題の本の内容の内、特に第2章についてお話をさせていただき、色々と意見交換をして大学院生の人たちとの交流を深めました。

本書の目次を画像で示しますが、第 2 章の主な部分は臨床心理学専攻の大学院に入学した院生のパンプキンさんが、カウンセリングの練習として、祖父のセイさんをクライアントと見立てて、インタビューをした結果のレポートとして指導教授に提出すると言った内容になっています。物語は著者の経験を下敷きにして、虚実が錯綜していますが、第 2 章は概ね作者の経験をそのまま述べることになりました。

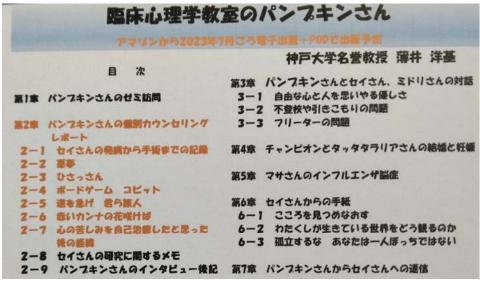
時間に沿った概略は以下の通りです;

- 1. 小学校1年生の時に発病して、4年生で手術、身障者となり、1年留年のあと小学校及び中学校はコルセット装着、高校時代は杖歩行で過ごして、合計14年間の闘病生活であった。
- 2. 手術後は酷いトラウマ状態で悪夢に悩まされたが、中学生になってようやく自己治癒し、悪夢から脱却した。
- 3. 大学生になって下肢のハンディキャップはあるものの、工学部の実験などもこなせるまでに回復した。
- 4. その後も、現在に至るまで、時に身障者としての痛みは感じるものの、元気に頑張ってきた。
- 5. 老化が進むにつれて、古傷の下肢の障害が再び顕在化して、再び杖歩行になっている今日この頃である。

臨床心理学の大学院生の皆さんが聴衆なので、折々の転機に作者が見た夢の話を織り交ぜ、 深層の意識から出てきたと思われる夢が、心理的なブレークスルーを引き起こしてきたことをお話し ました。 作者自身の考えを纏めて、臨床心理学についての認識を再認識する良い機会であった と思います。

ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。





フロンティア大学大学院人間科学研究科 修士課程臨床心理学専攻の大学院生を対象にした、「発達心理学特論」関連のお話の後半では、色々なご意見や質問をいただきました。 以下において、Q&Aの形で主なやり取りを掲載します。

Q: 幼児期に身体障害者になって、その後の精神的な痛みやトラウマを自己治癒していく過程で、 ご自分のこころの発達が回復に大きく寄与したと思われます。特に、ご家族や学校の先生、友人と の交流からこころが広がっていくことが大切であったと思われます。幼年期から思春期に差し掛か る時期は、急激に精神が発達する時期かと思いますが、先生が悪夢を克服して自己治癒したと思 われた時期は、具体的に何歳の頃だったのでしょうか?

A: 中学 1 年生の冬頃のことだったと記憶しています。雑誌に掲載されていた連続の漫画の物語の最終回に、主人公がそれまでの苦労や葛藤がすべて解決して幸せな状態になるのですが、それを読んだ日の夜に見た夢の中で、「私の悪夢もこれで終わった」と確信することが出来ました。そ

れ以来、時々金縛り状態に近づくことはあっても、悪夢の中に出てきた恐ろしい幽霊は現れなくなりました。幼児期から思春期に移るタイミングでそれまでの周囲の大人や友人との交流が私のこころの発達を促し、自己治癒能力が発揮されたものと考えます。

Q: トラウマの完全克服は難しいことですが、自分の悪夢は終わったと思う夢を見た後、悪夢は出なくなったことに強い関心を持ちました。夢とトラウマ解消について、追加の説明をお願いできますか?

A: 人との交流が子どもの心の発達に大きく影響を与えると思います。脳の発達と合わせて、深層 心理と言いますが奥深いところでの心理が夢に現れて、トラウマ解消に大きく影響することがあるの ではないかと思っています。

Q: 「人のために」を生涯持ち続けて、これまで歩んできたとのお話ですが、どうして工学における研究者の道を選らばれたのでしょうか?

A: 子どもの時から人のお世話になることが多かった私は、大人になったら「人に優しく、人のために」尽くそうと決心していました。高校進学後は、最初は文学部を志望していました。その内に医学部志望に代わってきました。知り合いの医師に相談すると、障害があるので臨床医は無理だろう、基礎医学の分野なら可能だ、と言われましたが基礎医学が何なのかも知らず、高校の生物の延長かと思い、物理や化学の方が好きだったので工学部に志望を変えました。高校の時にもっと広い分野の知識があれば、別の進路の選択もあったかと思いますが、今となっては工学を選択したことに満足しています。

Q: ご自分と同じ病名を告げられた子どもとお母さんと、偶々ある外科医の診察室で遭遇するお話がありました。その時、ご自分の障害のある身体を見せ、なお且つこれから十数年の闘病生活が待っていることを告げて、それでも頑張れと言ってあげたかったけれど、母子の受けるショックと瞬間的に天秤にかけて、敢えて話しかけなかったというエピソードをお話になりました。先生は今も同じ状況ならその母子に声掛けをすると思いますか?

A: 現在の私なら自分の現状を赤裸々に語りながら、これから運命に立ち向かって行かざるを得ない母子を励ましたと思います。その時の母子だけでなく、今は障害を持つ人に広く語りかけて力づけてあげたいと切に願っています。

コメント: 私は児童養護施設で心理担当職員としてアルバイトしています。その中で、幼児や児童が様々な理由で入所しています。心の傷やトラウマで反応が出たりする子も多くいます。先生のお話を聞いて、私は心理的ケアをしながら、子供の将来的な自己治癒能力が高められるような支援をしていきたいと思いました。ありがとうございました。